

浄土

1984-6

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特別投函記録) 第三五号
昭和五十九年五月二十五日印刷 昭和五十九年六月一日発行
第五十卷 六月号

天



小林



一月一句

休息日一日念仏雨安居

この一年もはや半年が過ぎようとしている。改めて月日の移ろいの無常迅速のさまに驚く。年のはじめに誓い願ったことを、日々の慌しさの中で、いとも簡単に忘れてしまうのは、これも凡夫衆生のあわれな性か。それにつけても菩薩の誓願の偉大なること。私たちにとってはなんとありがたかったことかと、ここにはるかに畏敬し、また心より感謝いたす次第である。

ところで、一年も半ばを過ぎるこの頃になると、わが身と心がいかに疲れ衰えてしまっていることである。六月、梅雨に入って、外はしつとりと雨が降り続いている。暗い雨空から降りきたる無聊の雨にかこつけて、久しぶりに得た休日を骨休めといたしたい。身・口・意の三業を休養にたゆたわせて、しかも精養、修練となればまことによい。時に別時

の一会を発願して、南無阿弥陀仏と称念する。

表掲の一句も、またまた駄作である。漢字ばかりを並べただけの句で、まさに念仏に心がこもっていないとの譏りはまぬがれない。とくに「休息日はなんとかならんか」と、宗匠にいわれたものだが、「未熟な句が、かえって私の念仏のありさまを伝えて真実です。これからの念仏精進を努力実践いたします」と答えて、強情を張ってしまった。今思えば、一字一字に気負いと執着が感じられ、恥ずかしいかぎりである。しかしその後の私に、この句を修正する作句ができないところを見ると、まだ精進ができていないというわけなのだろう。

まつさをな雨が降るなり雨安居 藤後左右

この句のような峻烈さ、人間としての厳しさに、私は欠けるのかもしれない。

(勝崎裕彦)

六月号



或は仏光あり。七尺を照らし、或
は一由旬二三四五由旬を照らす。

——『無量寿經』光明歎徳章

目次

法話

- 羅什のお墓……………若 林 隆 光……(2)
弟よ、法然上人の念仏よ……………大 橋 賢 一……(8)

《世相評談》

- 現代の怪談に思う……………宝 田 正 道……(18)

エッセイ

- 梅雨の頃……………矢 野 俊 雄……(24)

心のはなし

- スケッチ三題……………合 島 近 ……(13)

＜連載＞身体現象学シリーズ①

- 「顔」と「面」-1-……………佐 竹 隆 三……(35)

- ◎現代詩コーナー 雨の中で……………坂 田 文 三……(30)

- 浄土句集……………一 田 牛 畝 選……(32)

- ＜表紙裏＞一月一句「休息日一日念仏雨安居」

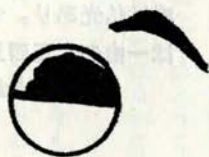
表紙 小林治郎 画

カット 大正大学美術部

(法)

(話)

羅什のお墓



西安に旅した浄土宗徒なら、善導大師の故地香積寺への参詣や実際寺址といわれる温国寺址の見学は欠かせない処であり、多く方々のご報告も見聞させて頂いた。ところが同じ

西安にありながら、羅什の墓のある草堂寺へお参りされる方が少いのはどうしたことだろうか。

NHKテレビのシルクロードが放映され、

わかばやし りゅう こう
若林 隆 光
(東京・台東区西光院住職)

喜多郎の音楽のかもしれない出ず幻想的なイメージが、どれ程日本人の夢をかきたてたかはかりしれないものがあり、後世からこの数年のブームをふりかえってみたら、理解に苦しむ処であろう。ところがテレビが第二部にうつると共に視聴率も急速に低下しつつあるといわれる。原因はいろいろあるが、シンクロード「絹の道」が仏教の道「ブッダシュトラセン」でなくなり、唯の絹の道だけになってしまったためであろうと思われる。日本人がいわゆる西域に憧れるのは、単なる冒険心のためばかりではなく、やはりわれわれの心の底に流れている仏教への親しみの念がそうさせているのだといって決して見当違いではあるまい。そして親しみの念を形成する一半が、子供のころから読んだり、見たりした「西遊記」の孫悟空や三蔵法師の姿によって多分に形づくられていることも言うまでもない。だから三蔵法師と言えば、玄奘三蔵と決ってしまった、羅什も真諦もその他の三蔵も皆忘れ

られてしまい、西安に旅した人はあまり深く考えもなく、興教寺の玄奘・窺基・円測の法相三祖塔にだけお詣りしてすましていたのである。

だが今更くどういふまでもなく、三蔵法師は玄奘に限るわけではなく、日本の仏教にとつては古今を通じて玄奘の影響より羅什の恩恵の方が遙かに大きいのである。「般若心経」こそ玄奘訳の「摩訶般若波羅蜜多心経」が一般に読誦されているが、これも羅什訳の方がわが国には先に輸入されているのであり、その他の經典で現行の宗派が羅什訳より玄奘訳を所依としている例は極めて少ないといつてよいであろう。ましてや浄土宗系の「阿彌陀經」、天台・日蓮宗系の「妙法蓮華經」の重要度を考えるなら、西安にいったら何故興教寺だけといって羅什の墓所草堂寺にお参りしないのかと憤慨しても、わたくしだけの独断偏見とはしかられない。更に浄土宗の僧侶にとつて、羅什がいわば仏教界で最初の妻帯者であ

ったことは考えさせる処が多いのではなからうか。

羅什は父クマーヤーナ、母ジーヴァの長子として生れたのだから、両親の名をとって名づけられたとすれば、当然クマーラジーヴァで、仮にジーヴァを什の一字にあてたとしても羅什と略するのは、漢音で一々鳩摩羅什と呼ぶ繁にたえなかった中国人のしたことに相違なく、決して本人が自ら理にあわない略称を名告ったものではあるまい。既にこんな処にも彼の生涯の縮図があらわれているといえよう。そもそも彼の父はインド人で宰相の家に生れながら出家し、パミールを越えて亀茲に來た人といわれている。そして亀茲国王の尊敬をうけて国師となりながら、王の妹に恋慕されて結婚し、羅什とその弟を設けた。ところが二子を生んだ後母ジーヴァは強く道心を起して自ら出家し、七歳の羅什をも出家させて、九歳の時に羅什をつれてインダス河を越えてカシミールに留学したのである。羅

什の伝記は羅什が出家し、羅什が留学したというけれど、年齢を考えれば、母の指図に従ったというべきであろう。父はどうなったか。妻に出家され、二人の男子を手もとから離した夫は、妻の兄である亀茲王の被護をも失い、破戒の身は再び出家することも叶わないまま蒸発するはかはなかったようである。羅什の生年は一応三五〇年頃と推定されているから（塚本善隆博士説）、一千六百年さかのぼった昔でも離婚の悲劇はあったのであり、強くて賢い母親と気弱い父親は今日だけの問題ではない。羅什がアビダルマを学び、やがて帰途カシュガルでスールヤソーマから大乘を授けられ、三論を習学するなどの経過は省略しよう。インドの言語を習得していたと思われる母の感化で、彼もシルクロード諸地の言語やサンスクリットに熟達し、テキストの暗誦に非凡の才を示したといわれる。亀茲に帰った羅什は二十歳に達して具足戒を受け、十誦律を習学しているから、秀才の少年は持戒の高

僧として近隣に知られることになり、神異の僧としても有名になって行くのである。

当時の高僧が神異によって軍陣に歓迎されたこと、いわば政治顧問の役目を果たしたことも今更いうまでもない。だが羅什の悲運はここに胚胎していた。前秦の苻堅に派遣された呂光が亀茲を亡ぼすと共に戦利品の第一として羅什を拉致し、以後羅什は呂光の幕下に使われることになる。そして羅什の真価を知らない呂光によって亀茲の王女をめあわせられ、固辞すると、「道士の操は先父をこえず、何ぞ辞する所あらんや」と酒を強いられて王女と共に密室に閉じこめられ、破戒してしまうのである。羅什三十五歳のときといわれる。前秦の滅亡により後凉を建てた呂光の下に羅什は十六年間に過すことになり、わずかに漢語の修得、中国古典の学習に便利を得ただけで壮年を送ることになるのである。「出三藏記集」や「高僧伝」などの仏教側資料は羅什の家庭生活について語らない。だから記述

の片鱗から想像するほかはないが、羅什には子供もおり、在俗に近い生活のなかで読書研究にふけたのではなからうか。羅什を慕って長安から僧肇が来ているのは、その様な生活の中でも仏教学者としての羅什の名が如何に高かったかを物語るものであろう。運命は二転、三転して羌族の建てた後秦の姚興に迎えられた羅什は四〇一年ようやく長安に入ることになる。今西安とよばれる長安は当時王名をはばかって常安といったらしいが、後凉から後秦に差出された羅什は五十二歳であった。子供までなした羅什の妻はどうしたのであろうか。

長安に迎えられた羅什が大寺及び逍遙園の訳場を与えられ、三十五部二百九十余卷、法華、維摩、阿弥陀、金剛般若、遺教等の諸經をはじめ、中論、百論、十二門論、十誦律などを訳出して、中国、日本の仏教に与えた影響が玄奘などの遙かに及ぶところでないことははじめにも述べた。この訳場逍遙園のあとが

草堂寺である。現草堂寺は唐末昭宗の八九六年建立といわれるから羅什當時のものではない。しかし姚興も時に臨御した逍遙園が今日のわれわれにとって羅什を羅什たらしめた場所であることはいうまでもない。そして法会などには綱渡りなどの雑伎も行なわれたという逍遙園で羅什は僧房に住まず、伎女十人を侍らせて解舎に住したといわれている。解舎は役所のことだから姚興から伎女と共に与えられた官舎であろうか。羅什は仏藏經を翻訳しているから、空の理解のないものはたとい二百五十戒をたもっても破戒に等しいという大乘戒の精神を主張する面もあったのかもしれないが、講經に当っては「臭泥の中に蓮花を生ずるが如し、ただ蓮花をとりて臭泥を取るなかれ」といい、日々の食事は鉄を飲むように、自分のようなものだけがそれにたえることが出来るのだから、凡人は自分にならなくてはならぬともいっている。羅什の生活が反省に満ちながら、しかも人間性の弱さを脱し得

なかったものであったことを物語ってあまりあるであろう。

ともあれ四〇九年八月、六十歳に達した羅什は草堂寺の地に没し、荼毘に附され後、伝訳にあやまりがなければ舌は焼け残るだろうと遺言した通り、舌だけは焼け残ったという舍利を納めた立派な舍利塔が草堂寺にある。西安からタクシーで約一時間、三十軒ほど、

終南山の連峯がいよいよ近づいて来た圭峯山の麓に草堂寺はある。方一町かなと思わせる塀を廻らした境内にはいると鐘や碑を納めた左右の小堂の正面に本堂があるが、中は空っぽの由で見せてもらえない。本堂の左手の瓦葺の煉瓦積の小堂の観音開きの扉の中に舍利塔がある。更にその左には井戸があつて、「草堂煙霧」の札がある。草堂煙霧は十景の一つもあるが、その煙霧は常に長安大雁塔の方に棚引いて、玄奘にものを教えるような気配が見えるという伝説があるとは番人の言葉であった。

さて参詣をすませて舍利塔を撮影しようとしたら一回、百元であるという。わたくしのお参りした昭和五十五年には一元百六十円であったから一万六千円である。敦煌でも一回五十元などといわれて腹を立ててやめてしまったのはその後のことになるが、羅什のお墓はどうでも写すべきだと思ったから、金百元を納めて撮影して来た。千年を隔てた「阿弥陀経」の同信を憐んだ羅什のおかげか、幸いに写真はいつていた。

強いられた、強いられたと言われつつ妻帯し続けた羅什。父の操を越えられなかった羅什は涼州の妻はどうしたのだろうかと気懸りでならない。草堂寺は正にわれわれ浄土宗徒に物思わせる寺である。西安にいったら興教寺や華嚴寺址は割愛しても、草堂寺にお参りすることをすすめる。中国のタクシーは一料一元だから写真よりは安い。

村瀬 秀雄 著

『和訳浄土三部経』

B 6判 四七四頁 価二五〇〇円

『和訳上人選択集』

B 6判 三八七頁 価二五〇〇円

『全訳上人勅修御伝』

B 6判 八四七頁 価六八〇〇円

『和訳善導大師観経四帖疏』

B 6判 五八四頁 価三五〇〇円

『和訳善導大師六時礼讃』

B 6判 二六五頁 価二四〇〇円

取扱い 法然上人讃仰会

(法)

(話)

弟よ、法然上人の念仏よ



弟よ 闘病中の弟よ

「しっかりせよ」の願ひのみなる

四日前、私の弟が心臓の手術をした。心臓の手術としては軽い「WPW症候群」だった。だから私共は、心配の中にも、どこかに安

大橋賢一
おおはし けんいち

心の種を宿していた。

ところが、手術も終わりに近づいて、人工心肺をはずし、本人の心臓にもどそうとしたとき、異変が起こった。私共には正確な説明ができないが、一種の拒否反応というのか、

ショック状態が起ったようだ。

危険状態である。

懸命な医師団の施術の甲斐あって、幸いにも一大危機は乗り越えられた。

その後、ICU室において、私共に説明があった。弟の身体は、そこにただ横たわっていた。顔は蒼白そのものだった。弟の嫁はただすすり泣いていた。

私共も懸命だった。懸命な眼に、機器の青い表示がいかに冷たく映った。

心臓の拍動を助ける「ポン、ポン」という音が、冷たく固まった私共の胸に響いた。

その翌朝の五分間の面会するとき、意識は戻っているものの、酸素吸入のために物言えぬ弟は激しく泣いた。

私は可哀想でならなかった。

まだ三十二歳の若さである。十数年の発作に悩み続け、心身の蘇生をかけて、漸く踏み切った手術だったのである。

しかし、この意外な事態の重さに、弟の不

安と悲しみは堰を切ったのであったろう。

私はその夜、駐車場の車に寄りつつ、不安と悲しみで心が凍るようであった。

「嘆かえば　ものみな暗し……」

この茂吉のことばは本当だと思った。

吾弟はや　危機を脱すと　聞きしかど

街の灯りの　いとおぼつか

私は御念仏を申すほかなかった。

この願い聞き給え。また、弟よ、仏の徳を受け入れよ。どうか浄土の寂光を受けて、静かに蘇生してほしい。

私はこのとき、幽囚の頻婆娑羅王の遙礼に對して、それを見そなわした釈尊の大神通を想った。

釈尊の光　遙礼娑羅王に

届くがごとく届け　この願

かくして私の心は徐々に落ち着いた。

寂光は非情の底に涵み入る光なのであらう。非情の光なるがゆえに、身も世もなき悲しみにも涵み入るのであらう。

されば、いま、弟の身を案じて不安と悲しみに陥っているこの所にも、寂光は届いている。

私はそう思った。すると、心が少し軽くなるようであった。

すると念仏は、身も世もなき悲しみを悲しみと知り（無我の自覚といえようか）——、やがて次に、身も世もなき悲しみの中に生きる我らゆえに、その非情さに沿った生き方をせねばならぬという（それが無我行といえようか）——、その無我への促しを、弥陀の寂光を受けて行じるもの、と言えよう。

法然上人の念仏は、この仏教伝統の「無我行」を明らかに継いでいる。

この、身も世もあらぬ現実に沁み入るものゆえ、「助け給え」の響きを持った現実の「声」でなければならぬ。

すなわち、南無阿弥陀仏の称名念仏でなければならぬ。

でなければ、現実の非情を非情と知ること

ができぬ。無我を無我と知ることができぬ。私はそう思い、いよいよ上人の念仏を尊く思った。

私は弟の生死を氣遣うがゆえに、寂滅の光を受けて念仏を申そう。

今、弟にも漸く安定のきざしが見えた。

重症の身には違いないが、快方の途に向かうのを願うほかはない。

だから、私は弟に対して、「しっかりとくれよ」と肩を叩いてやりたくなるのだ。

思えば、可哀想でならなくて遣りきれない気持ちから、「しっかりとするんだぞ」という励ましの気持ちに変わるのに、三日もかかったのであった。

○

こうして、自宅待機の許可が出た夕、漸く私は、法然上人領解の筆を執る余裕を見た。

とはいえ、必死で闘病中の弟のことが念頭から離れるべくもない。

小文が、個人的なものになった理由である。そして、気懸かりな心を持ちつつ開いた雑誌の親鸞特集号に、「法然に就いて法然を超える」という文章があった（歴史と人物）。

最初に「ただよき人のおおせのままに／ただ称えること／ただ称えること／ただ称えるほかに別の子細なきなり／ああ／ただよき人のおおせのままに、ただ念仏ただ念仏／ナムアミダブツ」という木村無相氏の詩（但し後半のみ引用）が挙げられていた。

法然上人の「一枚起請文」の意をとらえて、まさにその通りと思う。

しかし、この文章（竜谷大学学長、千葉乗隆氏文）の中ごろに、

「法然が一念往生を説いたのは、多くの念仏をとねえることのできない凡人であっても、信の一念によってたすかる道を示したものである。そこで信の一念において救われた以後の多念は、阿弥陀仏の救済にたいする感謝の念仏であった。こうした立場をはっきりと明

示したのが親鸞である。」

とされている信一念の念仏と、上人の「一枚起請文」の念仏と同じか、違うか、という問題がまず起こる。

最初の詩に表われている「一枚起請文」の念仏は、たしかに、この文章の表題、「法然に就いて」に当たるものであろう。

そうすれば、中ごろの信一念の念仏は「法然を超える」面を示すのであろうか。

それなら、この両者は、違う、としなければならぬ。

しかし、この文章ではそうになっていないのである。信一念の念仏に基づく多念は、法然上人の教えそのものだ、という立場に立っているのだ。

これでは、「法然に就いて法然を超える」とは言えないと思うが、どうだろうか。

さらに又、より基本的な問題がある。

はたして、信の一念において救われた以後の多念は、阿弥陀仏の救済にたいする感謝の

念仏であるということが、法然上人の教えてあるのかどうか、ということである。

これは、否、と言うほかはない。

なぜなら、上人の主著「選択集」第二章に、上人の念仏の中核的な意味をこめて引用された「一心に専ら弥陀の名号を念じ、行住坐臥に、時節の久近を問はず、念々に捨てざるもの、これを正定の業と名づく。(後略)」は、明らかに多念相統の念仏を勧めるものであって、上人の法語にも、「念仏不捨者の釈は念仏を行ずる様なり」とあるほどに、感謝で申す意はないのである。

同じ「選択集」第八章、「念仏の行者、必ず三心を具足すべし」として挙げられた三心のうち、至誠心は、「不善の三業をば、必ず、すべからく真実心中に捨すべし。(後略)」とあって、決して感謝の意ではない。

又、同第九章の四修の中に、「長時修」が挙げられて、不退精進の意を示されている。

これで、千葉氏のとらえた法然上人の念仏

というものが、千葉氏の我田引水の感を有することを述べた。

次に私は、「選択集」で示された念仏が、仏教としての伝統を正しく継いでいることを述べねばならない。

上人の念仏には、「一念をもつて一無上とす」(第五章)との一念義と共に、前述のような多念義を有する。かくして、浄土往生という自然悟道を究竟するのだ。

そしてこれは、世間と出世間二つながら認め、自然に出世間せしめる仏教の伝統を継いでいると言わねばならない。

世間をも見つめるがゆえに、懺悔・反省に基づく精進不退の称名である。それがやがて、一念無上の意味を有する道理によって世間を出離し、浄土の寂土に浴することとなる。

自然は世間の自然化であって、出世間(じゅうけん)にのみ属するものではなからう。

闘病中の弟を思う念仏には、すぐに感謝と結びつくような現実遊離などない筈だ。

心のはなし

スケッチ三題

一、地下鉄のホームで

先日、地下鉄のホームで、とてもかわいそうな光景を目撃した。
むこうから、子供連れのお母さんが歩いてくる。赤ん坊をおんぶして、三歳ぐらいの女の子の手をひいていく。女の子は、じゃれつくような、すねるような様子だったが、近づくにつれ、会話の内容がはっきりしてきた。

合ごう島じま近ちかし

(電気タイムス社長)

「ねえ、ジュース買ってってば」

「なあに？ジュース？いま歯医者さんに行ってきたばかりでしょ。ジュース飲んだら、虫歯が喜んじやって、また痛くなるんだけど、それでもいい？」

「だめっ」

幼い子供が、歯医者で痛い思いをしてきたのなら、ジュースぐらい飲ましてやっていいのではないかと思うが、ま、それはいい。かわいそうになったのはその後である。

女の子は欲求不満でしかたがない。しばらくもみ合うようなことをしていたが、やっとお母さんに抱っこされ、キヤッキヤッとはしゃいでいた。

ところがだ、そのお母さん、女の子をふりまわすようにしていたかと思うと、

「いまここへ電車が入ってくるから、そこへエイッと投げちゃおう」

そしたら、女の子は大あわてでお母さんからすり抜けると……どこへ逃げていいかわからない。かなり離れた柱のもとへくると、そこへしゃがみ込んで泣き出した。なんとも表現しにくい悲痛な声である。見ていた私も、思わずグッときてしまった。

お母さんは、と見ると平気な顔でいる。たまらなくなったので、お母さんを、

「そんな冗談はいけませんよ」

と叱りつけておいて、女の子の傍へかけ寄り、

「ねえ、おねえちゃん、いまのは冗談だよ。お母さんが、かわいいあんなのことを、そんなことするもんか。ほら、お母さんがむかえにくるよ。ね、お母さん、いまのは冗談ですよね」

幼い子供にとって、母親はすべてである。温かい胸に抱かれて、限らない安らぎを得たい。

通りすがりの他人ではあるが、女の子の心情を思うと、どうしてもたまってはいられたかったのである。

二、おしん

この三月まで続いたNHK朝の連続テレビ小説『おしん』が、たいへんな評判を呼んだ。日本中をおしんブームに巻き込んだ、と言ってもいいくらいである。

瀬戸山文相(当時)までが、すっかり感激して、わざわざ主役の少女と面会したそうである、

評判の理由はいろいろあるが、小林綾子という子役の、意識外ともいえる好演が大きいように思う。

「だいこんめし」に象徴される悲惨な生活環境——現代の若者には想像もつかないその暮らし向きが、実は多くの年配者が、実際に体験してきた現実であることの切実感。これがまず魅力ある舞台だ。

それに主人公は、スーパーマン的要素を持っている。苦しい境遇にも耐えに耐え、あるとき突然変身する。ただし、自身が変身するのではなく、周囲の状況ががらりと変り、変身したのと同様の効果をもたらす。そして普通の人にはマネのできない異常な能力を発揮する。

これが場所を移し、職業を変え、硬軟とりまぜた脇役を配しての展開だから、評判になったのも無理はない。せっかくの評判のドラマにケチをつけたら、ヘソまがりといわれるかも知れないし、大向こうからお叱りを受けるかも知れない。が、あえてケチをつけたい。

実は、ケチをつけたい点はいくつもある。親子、兄弟でありながらの冷血さ。夫婦愛の薄っぺらさ。「どんなことでも我慢して」と一大決意したかと思うと、「納得できないことは」と姑にもタテをつく。刹那刹那の非現実性など、具体例をあげたらキリがない。でも、これらは好みの違いの問題だから、文句をつける筋合いではない。

どうしても文句をつけたいのは一つ、それは脱走兵をあまりにも美化していることだ。なるほど個人としてはまことに好人物である。しかし、ここでは「個」に優先するものがあるはずである。

脱走兵は「人を殺したくないから」という。それじゃ、敵と命がけで相対している仲間のことをどう思ってくれるのだろう。愛すべき祖国の同胞をどう案じてくれるのか。日本が悪いのだから、みんなやられてもしかたないという思想なのだろうか。むろん当時の日本の行動を、すべて善なるものとして擁護するつもりはないし、個人の本来の心根を理解しないわけではない。が、親愛なるべき仲間を見捨てる脱走という行為は、人間の基本的な心が欠除していると思うのである。

三、帰郷

久しぶりに郷里へ帰ってきた。老母の健康に関して、兄から気になる電話をもらったからである。

帰ってみると、「不思議なくらい急に快くなった」(兄)ということで、楽しい幾日かを過ごしてきた。

母との対話もたっぷりできた。とりたてて大切な話があるわけではない。「腰が痛い、と言ったら、じっと寝てるのが一番と、先生に言われた」とか。「○○さんももう起き上がりむずかしいらしい」とか。「△△さんは、よく遊びにきてくれるが、もう耳が遠くて、話はいつも手マネばかり」といったことなどである。八十八という高齢だけに、いろいろな意識している筈だが、十八歳で早世した姉(母にとっては娘)や親父など、みんなまた逢えるという話になるので、みじめにはならない。

さまざまな想い出のこもる山野の散歩は、たとえようもない感慨にひたれる。土手すべりをして、小川に足をつつ込んだこと。そばの猫柳が、まるで笑ってるみたいだったこと。姉さんが、籠に詰めて持ってきてくれた細いおにぎりが、とてもうまかったこと。野イチゴ摘みに夢中になり、暗くなって急ぐ帰途、妹の大切な帽子を忘れてきたのを思い出し、決死の気持ちで引き返したこと。等々。

夜になると、何人もの幼な馴染が集ってくれる。一升瓶、取りたての筍、手造りの椎茸、特産の馬刺しなどで、思い思いの物を抱えて――。そして唄や話に夜の更けるのも忘れる。この頃は、山合いの村でもカラオケが盛ん

だそうだ。

こういう幸福感にひたっているとき、ふっと想い出したことがある。それは『砂の器』という松本清張原作の映画の場面である。

主人公が子供の頃、癪を患ったおじいさんと、杏の花の咲き乱れる村々を、冷たい扱いに耐えて、さまよい歩く痛々しい場面。そして成人した主人公が、その社会的地位を維持するため、自分の過去を消そうとする殺人――。

これにくらべて、過去を消すどころか、披瀝したい気持でいられる自分は、なんと幸福なんだろうと、改めてそのありがたさに感謝した次第である。

ところで、映画のバックに流れていた音楽は、なかなか名曲に思えた。いや私ばかりではない。一般的評価も低くなかったように思う。だいいち話の筋が、殺人者の主人公がつくったこの音楽が高い評価を受けることになっている。そのところが、私には疑問に思えてならないのである。つまり、たとえどんな条件下に育ったとしても自分の物欲のため、意図的に善人を殺害できるような悪人が、芸術性の高い作品をつくれる筈がない、というのが私の考えだからだ。

で、かねてからの疑問をさぐるべく原作を読んでみた。そしてホッとした。小説の中の主人公は、芸術というにはほど遠い前衛的作曲家だったのである。

音楽でも文学でも、あるいは絵や彫刻にしろ、根底に善なる心がなければ、名作など生れる筈がない、という持論は、今後も頑固に持ち続けたいと思う。

《世相評談》

現代の怪談に思う

○怪談は雨夜に生れる

今年の入梅は六月十一日、時の記念日の翌日に当る。あと約一カ月、うっとうしい梅雨のつづく、じめじめした嫌な季節である。

毎日毎夜、しとしとと降り続く雨は、陰湿そのもの。いつ止むかも分らない。まるでう



たから
だ
まさ
みち
宝田正道

す暗い墓場の中にとじこめられて、びしょぬれになりながら気味の悪い夜をすごすような気分である。心にもカビが生えそうである。

そういえば、昔から幽霊やお化けの出る晩は、大抵、こういう雨の夜が多く、怪談話もそのほうが効果的である。上田秋成や岡本綺堂の作品、それに藤沢衛彦編の妖怪変化談集などを読むと、どうやら化け物や怪物は、ほ

ほとんど雨好きとして描かれていることが多い。

○疑惑の銃弾と社長誘拐事件

ところが、文明や科学の進んだ今日でも、怪談話のネタは尽きない。梅雨の季節だから世相評談にふさわしく、現代の怪談を、二、三、紹介してみよう。

といっても、ここに登場するのは、一つ目小僧やろくろ首のような奇型をしたお化けではなく、れっきとした近代的正常人間である。しいていえばドラキュラー型の仮面をかぶった現代人といったほうが適切かもしれない。とにかく例を挙げよう。

まず、三年前に起きて「疑惑の銃弾」と騒がれている、いわゆる「ロス殺人事件」と、先般、大阪で起きた「グリコ社長誘拐事件」である。

このうち、前者は海外で人妻が凶弾に仆れたという悲惨なもので、捜査の困難性はわか

るが、被害者と行動を共にした夫が生き残っていて、その言動や周辺をめぐる数々の疑惑が取沙汰されており、マスコミも総力をあげて加害者の割出しに協力しているながら、複雑怪奇な様相を呈しつつ、未だに真相は何一つ判っていない。しかも、事件の結着がつかないうちに話題性で映画化までされる（新東宝KK）という奇妙な犯罪である。

また、後者は被害者が自力で檻禁場所から脱出し、諸種の傍証から犯人は事情熟知の者と見当がつきながら、依然として謎だらけで捜査は難航している。その上、犯人らしき一味からは、いまだに脅迫や挑戦を受けるという始末で、当局もお手上げの形である。

とにかく現在まで、どうしてこうもホシがつかめないのか、まことに奇々怪々な事件である、というほかはない。

○乱療と親子心中

さらにもう一つ、これは前二者と違って、

犯人は判っているが、今まで実態が社会的に明らに出ていなかったのが、むしろ不思議といえは不思議な事件がある。宇都宮の報徳会精神病院の患者虐待と、大阪の中野診療所の濃厚診療である。いずれも、常識を大きく外れた乱療ぶりといってよく、鉄のカーテンならぬ、薬物を扱う衝立の向う側では、想像もできぬ恐ろしい「暴力行為」や「薬漬け」が、平気で堂々と日常化されていたのである。ついでに言えば、この頃とみにマスコミを賑わしている親子心中も、見逃しえない殺人劇を形成していることを忘れてはなるまい。

サラ金禍や家庭不和、心身不如意その他、さまざまな理由で親が子を道づれに自殺するが、なぜか世間は「親子心中」というと、妙に同情的な見方をしがちである、しかし、これは、なんといっても明白な「殺人」行為といわざるをえない。親が死ぬのは勝手かもしれないが、何の罪もない子まで殺して罪の意

識を感じないとすれば、それは血の通った親とは言えまい。

親の身にしてみれば、心中の言い訳として後に残された幼児が不憫だからとか、可愛い子を親なし子とするに忍びないからとか、もっともらしい理屈をつけて子の道づれを正当化しようとするだろう。しかし、たとえどんな理由があろうとも、自らの手にかける以上は明らかな殺人である。言い逃れるすべはなく、情状酌量の余地は微塵もないのである。親とはいえ、みだりに子のいのちを私して、勝手に処分する権利は毛頭ないことを、この際声を大にして言っておきたい。親子心中は、親のエゴによる殺人罪として、この地上から抹殺すべきものであるにもかかわらず、日本人は特に、都合のよい時ばかり子をダシにつかい、あるいは心中を愛情の極致かのごとく錯覚して、子を親の犠牲にすることを黙認しようとする。そしてそれを美談のごとく評価する伝統的感傷主義に堕しているように思わ

れる。昔の封建的主従乃至家族制度の名残りが、子を私的に所有する觀念につながり、その生命まで親が左右してよい、と信じているのかもしれない。まことに、悲しむべく恐るべき怪談がここにも見出せるだろう。

○「金」がすべて

右例のように、世相は大なり小なり奇妙な今日の怪談だらけである。そして、昔の怪談は、主として男女間の恋愛のもつれ、怨讐などが原因となっていたが、今の怪談の多くは金銭的な欲得が主流を占めているように見える、いわゆる「金」がもとである。

犯罪のかげに金と女がつきものであることは昔からの定石であるが、今日では、むしろ「金」がすべてである、と言っても過言ではあるまい。事実、「金」さえあれば、大抵のことはやっつてのけられる。政治も教育も延命も何もかも。そして殺人までが金次第である。

地獄の沙汰ではないけれど、「金」が万事の世の中だから、金のない庶民にとって、金が動かすあらゆる事件がすべて不可解な怪談話とうつるのも無理からぬことであろう。

要するに、「金」さえ手に入るなら、何でもやってみせる、というのが現代人の特攻氣質らしい。白昼、堂々とピストルをかざして銀座の宝石店へ侵入、客の前で一億円の金塊を強奪するという、西部劇まがいの事件さえ起きる（四月十九日）世の中である。金に縁のない庶民にとっては、ただ恐ろしいばかりで、せいぜい防犯策に頭をひねるくらいが関の山かもしれないが……。

○人間性の喪失

さて、結論を急がねばなるまい。

以上挙げた例のごとく、「金」のために非情凶悪な怪談事件が続出するにしても、これは要するに人間がまっとうな人間性を喪失し

欲望の亡者になり下っているからに他ならないからだ、と言えるのではなからうか。

お化け大会や試胆会など、夏の夜の涼み台で話題となった化物や怪物、幽霊などは、詮人間がつくったものではあるが、人間ではなかった。一つ目小僧やのっぺらぼう、それに足のない幽霊など、いずれもどこかで人間とは違う個性がはつきりと判っていた。ところが今日の怪談の主人公はれっきとした人間そのものである。姿も知識もすべて現代人間に違いない。ただ、彼らは人間性を失格し、むしろ野獸性をむき出しにした仮面人間である点が、昔の怪談の主よりも狡猾で度しがたく、一層気味悪い存在なのである。

科学の進歩に使噓されて怪事件を起すこれら白昼の魘魅魘魘たちは、人間失格のまま、時代に悪乗りして「機」の自覚さえ忘れ、天を恐れず、「金」の世界をわが物顔に跳梁しているわけである。思い上りも甚だしい。

思うに、人間には人間らしい「機」がある。

一言でいうならば凡愚である。凡愚なればこそ、仲間同士への喜怒哀楽も素直に發揮するし、天や神仏を待む謙譲の美や敬虔の祈りも忘れない。人生への愛着も感ずれば三宝への帰依心も起す。それが全うな人間としての一般的なあり方なのである。人間性を失った怪物には、この機能も全く退化し、「賢しら」だけが発達しているのである。だから常識では考えられない怪談を平気ででっち上げる神経もあるわけである。

○「機」を自覚せよ

こんな大人ばかりのいびつな世界を目前にして、近頃、「大人になりたくない」という子どもたちが増え、いわゆる未成熟人間の時代さえ来ようとしてつあるという。『浄土宗新聞』の五月号では、その「大人子ども」の実態を取上げて特集しているが、一方で人間性欠落の怪物が横行し、他方では子どもめい

た大人ばかりが増加していくというのでは、この世は心なき怪人だらけの二十一世紀となってしまう。

人間は今、もう一度宗教心を取戻し、「機」の自覚を踏まえた人間復興、人心再発見へ力を注がなければならない。「賢しら」を捨てて「愚痴」の精神に還ることが必要なのである。

すでに八百年前、法然上人は、知恵や学問のみに頼る人間の無力さを指摘されたが、今や人類は、核兵器をはじめ、人工授精、試験管ベビーはおろか遺伝子の組替えなど、神の領域たる「いのち」の生殺与奪の権まで手に入れようとしている。おこがましい限りである。みんな頭を冷やして己れの愚に目覚め、人間らしさを取戻す努力をすべきではなからうか。生きる「いのち」の白道は、そこにしか開かれないことを、この際、声を大にして叫ぶ次第である。

(了)

長田芳一画 五雨みなこ文

絵本 ほうねんさま

B 6変型判／定価三〇〇円

右近れい子画 福嶋智誉編

絵本 おじぞうさま

B 6判／七二頁／定価四〇〇円

仏教まんが・教育図書

◎子供たちのやさしく、すこやかな成長を願って、大人たちからのすばらしいプレゼントにご利用下さい。

大 道 社

〒102 東京都千代田区飯田橋一―一一六

電話(〇三)二六二―五九四四 振替(東京)一八三四七

梅 雨 の 頃



○何時でも何処でも精一杯

愛読月刊『浄土』誌より寄稿の依頼を受けました。もとより文筆の者でもなし、書画の者でもなし、困惑の態で何日か経過しましたが、考えて見れば多少「布教」の道に研修を求めている身なれば、出来るだけ素直に我が身辺を中心にして平素種々と感じていることを述べてみたいと思います。

私の机の前には何年か前自分で書いた自戒の一紙を貼りつけています。「常に浄土一宗信仰布教の場

やのしゅんゆう
矢野俊雄

(福岡教区教化団長
北九州市円応寺住職)

に在りし円応寺主隆阿顯誉」とあります。特に「隆阿」といただいた号は記憶も今猶鮮烈の想いです。何年前になりましたか。久方振りの夏安居で祖山に登嶺した時勿論思いをかけて行つてはおりましたが、布教道では有名な「林隆碩師」の講義、言動に接したあの時のことを。ほんとに懐かしく今でも猶新たによみがえる気持がこみ上げてきます。

私にとりましては唯一度の最後の御尊姿と思い最前列にすわりました。尼僧様に手をとられ静かに入場されたお姿、前かがみにお腰もまがっておられま

したが痛々しい中にビリツとした緊張感を覚え
ました。何か崇高な感じの中に引き込まれる感じであ
りました。ただ一筋に「宗乗」を求め、清貧な境遇
を意に介せず黙々として辿った求道の信念は私の凡
てを引き込まずにはおれませんでした。「一枚起請
文」の講題のもとに端々とした風情の中にも嚴肅な
格調であつたと、忘れられない法縁の印象猶焼き
ついています。今やその先師姿なし。「本願念仏の正
義を示す」「学徒を遺誡す」「學者になる学は容易で
あるが、無学になる学は困難だと申されますが念仏
は無学の学であります。一休禪師はこの文に感歎し
て、知者をして尼入道に同ぜしむ。一枚起請尤も奇
なる哉と鑽仰なされてあります」「知恵ありと思え
る知恵に障えられて、あわれ誠の道を失う」——耳朶
に残る遍片の言葉。まことに有ること難しでありま
す。

今にして猶残り蘇える先師の講議。最後に次の歌
を示されました。「あさあさとかきうかべたる吉水
の深き心はくみてこそ知れ。あさあさとかき流した
る吉水の深き恵を知れよ世の人」——私には思わす

「あさあさ上人」とつぶやくような思いであります。
当時録音テープにとることが流行の時勢、私も案
の如く録音にとらせていただき保存しております。
お言葉ははつきり聞きとれない箇所ばかりですが、
ザアザアと激しい雨音が一杯で時折、用達で登
ってくる運送車のクラクションの音が大きく入っ
ております。恐らく梅雨時の激しい降雨の日ではな
かつたでしょうか。はつきり聞きとれないでも、私に
は有難い、懐かしい若き頃の一頁であります。

去る年の梅雨時の、祖山雪香殿における夏安居の
一コマであります。滅多に会わない夏安居の一期一
会。祖山近くの京阪神在住のご寺院様方はなんと幸
福なことであらうかと時々考えさせられる時、又時
にしか上山出来ない我々地方寺院の者としても結構
な因縁（めぐり合わせ）は何時でも何処でも充滿して
いることでもあります。いろいろな人、どこでも出
会ふ時、何の気もなしに語り合う時に常に「布教の
道」であることを喜ばずにはおれません。

その翌年聖書伝受を受け、先師の一字を選び（迷
わず）まことにここに生まれかわった気持で、つた

ない斯道を歩一歩歩ませて頂いています。何年前になることか。さだかに思い出せない年輩になっています。考えてみれば布教しない寺院、布教の考えもない僧程一番安楽ではなからうかと思う時がある位、布教のこと程難行苦行ではないでしょうか。「安心よ。何時でも何処でも精一杯。——此処に居ます、山川草木成仏国土成就衆生」と、仏の願力によりて一定往生の約束があればこそ、苦しみの中に生かされる希望が仏のおん力ばかりにて往生されるとは、これ誠に不思議であります。「氷がとけたら何になる」と問えば、氷がとけたら水になるでしようかと、殆どの者が答えた子供の中に、「氷がとけたら春がやって来る」と一人の子供が笑みを浮かべて答えたことです。その言葉、誠に良しであります。決して戯論ではありません。

○念仏申せば「病氣」はすぐ治る

日本特有の雨期「梅雨」です。「霽陶しい」という言葉がどこでも聞かれます。言葉は態を表わすと言われますように気持までもふさがれて来るように

す。ここに知らず知らずの間に語っている言葉に、「輪廻」という仏教独特の日本語があります。凡ては巡り廻ると言う意味であります。ひと時として、そこにとどまらず、どんどん移り変り、昨日の私ではないと言うことです。——考えてみれば、一年中「梅雨」ではないとのことです。

「梅雨」が過ぎれば夏がやって来る。「お盆」が近づいて来る。あの故郷に帰ろうかな——という気が持が次第にこみあげて来るのが今の時期でしょう。都会に出ていた核家族の若者が、懐かしい我が故郷を思う頃になるのが「梅雨」でもありましょう。

田舎のわが菩提寺の「方丈さん」はどないしてるやろうか!!」と思い出してくれる若者が一人でも多くなればこれにこしたことはないが、そんなに世の中は調子よく行くものではないでしょう。「皆さん、本日はよくお詣り下さいましたね。あのね、法然上人様が私達にお残し下さいましたお念仏、南無阿弥陀仏と口に申すことです。そう、そのお念仏をです。私、だけどうぞ助け給えとちょっとの間眼を閉じて合掌して考えてごらんさい。ハイッ。ご一緒

に唱えましよう。如來大慈悲愛愍護念加祐を垂れ給わんことを。同唱十念。有難うございます。ご一緒に大きな声でお念仏を申し戴きました。お蔭ですっかり、病氣は只今スッカリ治りましたね。病院に行かないでもお蔭で一遍に治りましたね。癌も血圧も神経痛も(その他も)病院に行かないでもすぐ治りますね——時々法話の始まりの言葉に出します。エッと驚きの眼を開く者、ハハーと笑い出す者、だまって見つめる者、いろいろ種々雑多です。そこでもう一度、「病氣は念仏申せばすぐに治ります。もう心配はありませんよ」と念を押します。

話題の種に困った時いつも此の調子で病氣のことで始まります。人間皆病氣であるから通ずるということではないでしょうか。実はこれには日本語の妙味が隠されているように思えてなりません。「皆さんは自身の体のことまで氣を病むと病氣の言葉を使っているのではないのでしょうか。この身体はどうしようもない。年々刻々古くなって行くのが当然で、どこが悪くなるのは万物、生ある者は避けることは出来ないのです。身体のことまで病氣という言葉

を使うので変な具合になって行くのです。病氣と病体と分けて使うように練習してごらん下さい。病体は比較的軽くなり(中には不思議にそのまま治ることもあるそうです)病氣は一遍に治ると私はいつも喜んでいいます」と言ったら、大抵半分の方達はドッと笑い声を出します。長寿を保ち、身体健康な方を調べてみると、歳々刻々念仏の声の中に病氣が一遍々々に治っておる方ではないでしょうか。

生々流転、巡りまわる事象に執着の無いのが、少ないのが実は病体、健康に影響をもたらずののではないのでしょうか。病体には必ず限界が尽き次の世代にゆずって行かねばなりません。積尊の悟り、元祖法然上人様の開宗及び開眼の一端が拝まれるようです。「心静かなれば身涼し」と白楽天の詞にあります。心の中に深く阿弥陀仏を信じ日々の修養を怠らず進みますならば心は常に寂靜平穏であります。あの雲を突き出れば無限の青空が待っているのです。苦しいことが人生であって、実はそれが楽しいことではないのでしょうか。何も難かしいことはありません。私

の身体は刻々古くなって行くのですが、我が心の病氣は一遍々の念仏により度毎にすぐ治り、身体までも軽くして頂くとはい、まことにあること難しであります。大きな嬉しいご利益です。お腹に手当して「助け給え」南無阿弥陀仏と大きな声で唱えてみましょう。梅雨の鬱陶しさは何処かに吹っ飛んで、身体も病氣も清々楽々に若返り、無量の寿命ここに約束され、嬉しいことに必ず「病氣」は治るのです。

○有情・毛穴から入る仏法

計り知れない無限の力によって、私達は生かされていると聞かされます。無限であり無量寿といいたく。有限と無限のこと、人生における永遠の課題です。この宇宙の歴史は始まって以来二兆年と言われています。地球の歴史は約四十五億年です。我々生物としての人間の細胞は一四〇億あると言われています。日頃よく聞かされていることを数字で記してみました、これでも有限でありましょうか。

「阿弥陀」の意味は深淵であります。この新春の年頭にある政治家が語っていました。——私は座右

の銘として「有情」という言葉が好きです。人間は死のうと思っても死なくしてくれない。又生きようと思っても生かしてくれないものです。今年は順境におごらず逆境に屈せず頑張りたい——と、何の氣もなしに聞いていましたが、胸の中にグサッと刺される思いでした。人間は罪深いものです。だから辛抱しなさい。罪深い人間だから懺悔して（念仏すれば）そこに喜びが生まれる。忍耐・清貧の徳目は仏法の目ざめなくしては実現出来ないものでありましょう。「裸にて生まれてきたのに何の不足（二茶）」「足ることを知ればこそあれ福の神 二つ鯛つる恵比須なければ（仙涯和尚）」と詠まれています。時に仏法の話の中には難しい話もあると思いますが、わからなくても御法の話は毛穴から入ります。いつかは必ず法の力で救われると言われています。

現在における教育の難しい課題である「親孝行」にしても「親孝行」というものは親の姿があるからするものじゃない。本当の親孝行とは、親の姿がなくなれば自分を育ててくれている多くの人々にご恩を返していくことだと知らされます。お金に換えら

れない終生の大きな財産になっているのだと感謝の念を毛穴より頂たくわけです。男女十七歳（最も難かしい思春期の頃として）までどれ程の数の方々にお世話になっているか。二十代……三十代となればどれだけ広がつて行くでありましょうか。それこそ無限であり、「無量寿」の意義深淵であります。まさに「末法濁乱の機」に当り「弥陀の本願を深く信じて念仏を喜び幸福を願う人と世」でありましょう。皆成仏・往生ならざるはなし。——鬱陶しい「梅雨」の時節もその一つの過程として喜べば、幾らかでも現代の健康法の一端に通ずるのではないでしょう。

拙ない感傷になりましたが、いつも梅雨になると思い出す、ただ一回の巡り合い、「林隆碩先師」のことから記してみました。一刻々常に浄土一宗信仰布教の場に在ることを喜び確認して進みたいものであります。

「おかげの中を生きつづけ、おかげの国へ旅立たん。おかげは永遠につづくもの、私はひとり手を合わす、幸しあわせものだ」と手を合わす」

|| 新刊 ||

竹中信常著

『仏教への問いかけ』

B 6判函入 二七五頁

定価 三五〇〇円（〒二五〇円）

○仏教の生活信仰を、宗教学の学問的蓄積とその真摯な実践体験を通して、改めて問いかけ、語りかけようとする——

△発売▽

山喜房仏書林

〒113 東京都文京区本郷五―二八―四
振替 東京〇―一九〇〇

雨の中で

坂^{さか}
田^た
文^{ぶん}
三^{ぞう}

都会の大きな建物が暗い雨に霞む
夕影さえも雨雲の黒い大屋根に包まれる

ひそひそと降りしきる長雨

ヘッドライトに映し出されても

もはや恥じらうことも知らない

むしろ七変化をほころばす紫陽花が

暮れかけた街路に置き去りにされて“あわれ”を誘う

濡れた傘 濡れた靴 濡れた背広

雨の正体を問うために

明かりの灯りはじめた帰り道を家路へと急ぐ

浄土句集

一田牛畝選

山梨 青山富貴江
山車だしを引くにげ祭と言う川の町

福岡 原 敬二郎
水温むこと気付きつつ顔洗う

福岡 安藤平次郎
斑雲山の稜線かくしけり

群馬 島津 か寿
囀や迦陵頻迎の声かとも

東京 真野 竜
卒業式笑ひの絶えぬ幼稚園

評 夢うつつに囀を聴いていると、何とも

評 可愛い幼稚園の卒業式である。可愛い

言い得ぬ快い気持になり、あたかも極楽
まいるしているような気持である。迦陵
頻迎の声も斯くならんと楽しさの限りで
あるらしい。

笑いがあちこちで絶えないのである。い
よいよ小学校へ行く希望の眼は輝いてい
るようである。

福岡 行正一如子
眉白き僧が彼岸の鐘を撞く
東京 野本 知子
お札所の礎のくづれや春落葉

熊本 山崎 石庭
囀なげひの法主の言葉あたたかし

福岡 上滝津弥音
装まきへど気分すぐれず春の風邪

東京 田中 秀代
増上寺沈丁の香の風に乗り

評 大本山善導寺の開山忌に熊本県代表と

福岡 秋葉 淳
みちのくに春意ようやく兆しそむ

東京 吉原登起子
病床に匂袋や春の風

言葉を受けられた喜びを表されている
のである。

山形 松田 光誉
三寒またたの山瞬またたきを忘れをり

東京 末常てる子
春泥に袈裟氣にしつ送葬に

東京 細田 初枝

山口 上野 明達

大分 丹羽 難中

淡雪の吸はれゆきけり砂置場

仏跡を巡り心のあたたかく

黄水仙隣境に彼岸寺

福岡 服部 光代

東京 真野よし子

福岡 林 澄山

日脚のぶ夕餉仕度のついおそく

摘草の土手より低き無縁墓

娘はみんな嫁がせ妻の雛飾る

福岡 荒牧 還愚

東京 猪瀬 幸子

熊本 山崎 松子

花の雨参道お練り開山忌

天窓の春星うるみ友逝けり

紅梅に雲一つなき島日和

東京 吉田ゆきゑ

東京 栗原やえ子

福岡 行正 明弘

草餅や父の退院待たる日

おはじきは浅草土産春の夜

大木魚打って逃げる子彼岸寺

長野 友渕旋風子

東京 満尾衣有子

福岡 山崎 鬼川

恋猫の橋飛び越えて転びけり

防虫剤求め懷炉を買ひたしぬ

何に怒り犬吠えつづく春の月

京都 安川 彬光

東京 小笠原香祥

福岡 釈河野ねはん

雪解水磨りて写経の筆を染む

春の朝合格速達皆笑顔

厨より露の臺煮る匂ひかな

三重 山田 歌甫

神奈川 鈴木美智子

福岡 木下富士女

雨上り流れ激しく猫柳

夢に見し人のことなど彼岸かな

春浅し宰府の茶屋の緋毛氈

東京 岩沢 正義

福岡 前田 秀峰

折角の鵜飼中止の宵の雨 一田 牛畝

御忌の稚児散華に列の乱れけり

風花や錫杖失せし辻地蔵

法然上人の人柄と教えの全容を究明する学際的研究

『法然浄土教の総合的研究』

〔編集〕

大正大学 竹中信常

佛教大学 水谷幸正

〔発行〕

山喜房仏書林

〔体裁〕

A5版 六一〇頁 定価 一二、〇〇〇円

「吉水の法流」につらなるわれわれは、改めて法然上人の人柄とその教えの全容を深く理解し実践すべき使命にある。幸いにして、今回わが宗の学人の力を結集し、『法然浄土教の総合的研究』が編せられた。これによって新らしい光りを投げかけられた法然教学の全容を味読して、浄土宗念仏信仰の前途を洋々たらしめんことを念願する。

△浄土宗宗務総長・浄土宗奨学会理事長▽武田育彦師の序文より

○申込先

〒113 東京都文京区本郷五―二八―四

山喜房仏書林

(振替) 東京 〇―一九〇〇

「顔」と「面」——「身体言語」(Leisprache)に関する基礎的研究・1

佐 隆 三
さ たけ りゅう ぞう

(大正大学教授・医博)

「身体言語」概説——序に代えて

仏教には古くから「心身一如」という言葉があり、「こころ(心)」と「からだ(身体)」とを対立させて二理論的に把握しようとするヨーロッパ人とは異って、日本人は本来「人間」や「生」をありのままの形で、いわば現象学的に捉えようとする傾向が著しく、しかも人間存在のあり方として「心身一如」の境地が望ましく、日常の訓練を介してこのような状態に達することが目標とし

て志向されているように思われる。

何かに「一所懸命」に「没頭」して「三昧境」に入るとき、人は「精神的存在」であることも「身体的存在」であることも忘れて、一つの行為や活動に身をゆだねている自己自身を発見するであろう。このような「没頭の状態」や「無我の境地」は、一過性ではあるがしばしば日常の生活で体験することができる。無心になって書に親しむとか、絵をかくとか、読書や翻訳や原稿の執筆などに熱中している時、スポーツの試合の時等々枚挙に暇がない。客観的・分析的に考察するならば、このような

状態は、能動的な注意集中と意志緊張の持続の状態である。

これとはまさに対照的に、モーツアルトの音楽に耳を傾ける時、一級品の絵画・彫刻など芸術作品の前で佇む時、夕陽の美しさに心を奪われた時などのように、対象に圧倒され、魅惑され、受動的に注意が固定され、深い感動を覚えた時にも、同じように「無我の境地」を体験する。

このように考えるならば、「心身一如」の状態というものは、何か特別な崇高な境地というよりは、むしろありふれた日常体験の一つに過ぎないということになるであらう。

しかし、これに反して、われわれが精神的な存在であり、身体的存在でもあることを痛感せざるをえない状態に立ち至ることもしばしば体験する。すなわち、ここからだの対立・反目、矛盾・葛藤の状態である。不眠や食思不振・疲労、知覚異常や運動麻痺などはもつともありふれた経験の事実で、身体はしばしば精神に反抗する。インポテンツに悩む性神経症^{セクシュアル・ニューロシス}患者やうつ病患者における心身の分離・反目の苦悩はきわめて深刻である。

高温湿いかも高温の日本の梅雨期の気候は誰にとっても不快なものであるが、ワイシャツが汗で身体にべばりつく不快感に耐えながら講義を続けねばならない時、生身の身体をもつ身体的存在であることをわたくしはいやでも痛感する。十数年間胃潰瘍のため飢餓痛を耐えねばならなかったことや、数カ月「睫毛内反^{まつげうちへん}」のため角膜の傷の痛みや流涙・眼やにに耐えたことなど、過ぎてしまえばむしろ懐しく回想されるが、疼痛は人間がまぎれもなく身体的存在であることを自覚させる。

これとは反対に、生理的な快感を知覚し身体的には快適な状態であるにも拘らず、精神的な充実感や満足感がなく、むしろ反対に虚しさや孤独感や退屈を感じる時もある。このように、精神と身体は全面的合一を失い、精神は身体に反逆し、身体は精神に反抗する。まことに不思議なことと言わねばならない。

「身体とは何か」——という問いに答えることはむずかしい。デカルトは「精神」と「身体(物体)」とを二つの実体として明確に区別したうえで、しかも人間存在においては、精神が身体に合一していることを認めるという立場をとっている。

ライプニッツの「予定の調和」の理論やウィリアム・ジェイムスの「われわれは悲しいから泣くのではなく、泣くから悲しいのだ」という言葉を俟つまでもなく、精神と身体は密接・不離の形で合一し、敢えてこの両者を区別しようとするならば、「精神」も「身体」もそれぞれ一種の抽象的な極限概念となってしまう、現実には生きている人間を正しく理解することから遠ざかってしまうという結果になるであらう。

いまわたくしはこの原稿を書きつつあるが、わたくしにとって、考えること(思考という精神作業)とペンを手にして文字を書くこと(書字という筋肉運動)との間には密接な結合と全面的な合一があり、原稿執筆という作業がほとんどなく進行している。考えながら書き、書きながら考える。途中文字を書き間違えたり、文章が拙劣だと感じた場合は、直ちに訂正する。或いは読み返えして文章を推敲する。

このように、われわれの日常の具体的行動に徴しても、精神的・心理的プロセスと身体的・生理的プロセスとは常に同時性を保ちつつ、分ちがたい一つの全体としての作業ないし活動として体験され、違和感をもつこと

はない。

比較的最近になって、哲学の分野で「身体」や「知覚」についての関心が高まり、市川 浩教授の「精神としての身体」、湯浅慎一教授の「知覚と身体現象学」などのすぐれた業績があり、ヨーロッパではモーリス・メルロ・ポンティの「知覚の現象学」の名著がある。わが国では精神医学とくに精神病理学の領域において、「身体言語」に関して荻野恒一博士、木村 敏教授、霜山徳爾教授、土居健郎教授等の短いけれどもすぐれた考察がある。

わたくしは「身体言語」に関する基礎的研究という意味で、「身体部位」を含む日本語の表現に注目し、約四十五万語の日本語の語彙の中から身体部位を含む言葉を抽出し、これらの表現がいかにこころの働きや作用を意味しているかを考察し、日本語の表現の世界に類を見ない用法を明らかにしようと試みた。

なにげなくわたくし達が日常生活の中で、われわれが身体的存在でもあることを如実に示してくれる表現が日

本語には意外に多く、日本語の表現の豊かさに驚くのである。このような日常語的表現が単なる比喩や文学的表現ではなく、実は含蓄的な限りなく深い人間存在の様相をわれわれに示してくれる。

ドイツ語の Geist は主として思考を中心とした「こころ」を意味し、大脳皮質に局在する。これに対して Seele は感情および意志を中心とした「こころ」(日本語の「心情」に当該)を意味し、心臓(胸)に局在する。

ドイツ語の Herz には次のような意味が区別される。

(一)心臓。

(二)胸。

(三)感情、気持、愛情、親切、同情、関心、胸中、心底。

(四)勇気、剛毅、決意。

(五)中心(部)、中核。

(六)(カルタの)ハート、ハート形のもの。

(七)(云々の)心をもつ人。有情な人。

(八)愛人、恋人。

(九)(果実の心)心^と。

心臓がこころを意味する用法として若干の実例を次に

挙げてみよう。

sein Herz ausschütten (心を打ちあける、あけすけに言う)
sein Herz entdecken (心中を打ちあける、愛を告白する)
seinem Herzen Luft machen (心中を打ちあける)
sein Herz sprechen lassen (心中を打ちあける)
Hand aufs Herz! (率直に言え、打ち明ける)
vom Herzen sprechen (心のほどを話す)
jemanden ins Herz sehen (或人の心中を見抜く)
ein warmes Herz (温かい心)
ein gutes Herz haben (親切である)
kein Herz haben (無情である、勇気がない、怯懦である)
mit halbem Herzen (うい加減な気持で)
Es ist mir schwer ums Herz (わたくしは気持が重い、憂うつである)
von Herzen (心から) von Herzen gern (心から喜んで)
von ganzem Herzen (衷心から、大喜びで)

この他に、日本語の表現では「断腸の思い」(ドイツ語では腸は Darm である)となる言い方がドイツ語では心臓

(Herz)の語を用いて、次のように表現するが、興味深いものである。

Das Herz blutete mir. (わたくしは断腸の思ひであつた)

Das zerreisst mir das Herz. (わたくしはその事で断腸の思ひである)

心臓(Herz)が端的に「こころ」を現わす語としては、名詞形では、Herzblut(文字通りの「心臓の血」の意味の他に、心血、生命、真実)、Herzeleid(心痛・悲痛・傷心)、Herzensangst(心痛、苦悩)、Herzensanteil(同情、関心)、Herzensbruder(最愛の兄弟、親友、仲間)、Herzensergissung(心情の吐露、心を打ちあけること)、Herzensfrende(心からなる喜ぶ)、Herzensfreunde(親友)、Herzensgrund(心底)、Herzensgüte(親切)、Herzenshärte(冷酷)、Herzensummer(心痛、苦悩)、Herzenslust(心からなる喜び、願望)、Herzensstille(心の平静)、Herzenswärme(温情、思ひやり)、Herzenswunsch(念願、願望)、Herzlichkeit(真心、親切、情愛)、Herzwurm(良心の責め)などがあり、形容詞の形では、herzbeklemmend(心痛やせる)、herzbewegend(心を動かす、鼓

舞する、感動させる、悲愴な)、herzbrechend(傷心の、悲痛な)、herzerfreund(心を喜ばせる)、herzergreifend(感動させる、悲愴な)、herzerhebend(心を高揚する、心を鼓舞する)、herzergreifend(心を喜ばせる)、herzgewinnend(人の心をひきつける、人心を得る、愛嬌ある)、herzhaft(勇敢な、男々しい、心からなる、断乎たる、思い切った、旺盛な「食欲」、実質ある「食事」、力強い、甚しい)、herzig(心からなる、誠実な、忠実な、親切な、愛らしい、最愛の)、herzinig(心からなる、親切な)、herzlich(心からの、誠心誠意の、親切な、ねんごろな、心をこめて、心から、ねんごろに、非常に、甚しく、大いに)、herzlieb(心から愛する、最愛の)、herzlos(心臓のない、無情な、冷酷な)、herznagend(心を苦める、無念な)、herzstärkend(強心の、氣力をくれる)、herzzerreisend(胸のはり裂けるような、悲痛やるかたなきな)などがある。

日本語の「こころ」をドイツ語に翻訳することはかなり難しい。というのは、「こころ」は多義的で、この場合はどのような意味で「こころ」という語が用いられているかを適切に判断して、正確にそれに相応するように翻訳しなければならない。

日本語の「こころ」に相応するドイツ語の言葉は、次

に示すように、かなり多い。

- (一) (心) das Herz, das das Gemüt, die Gesinnung
- (感情) das Gefühl
- (精神) der Geist
- (靈魂) die Seele
- (二) (思想) der Gedanke, die Idee
- (顧慮) die Rücksicht, die Berücksichtigung
- (留意) die Aufmerksamkeit
- (関心) das Interesse
- (同情) das Mitleid
- (三) (意志) der Wille
- (意図) die Absicht
- (願望) der Wunsch
- (好み) der Geschmack
- (四) (素質) die Anlage
- (五) (謎のこころ) der Sinn eines Rätsels

日本語をドイツ語に翻訳する場合、Herz (心臓) を用いる用法としては、次のようなものがある。

- こころの闇 die Finsternis des Herzens
- こころをやわら mildherzig (= zärtlich)
- こころのふさ gutherzig (= gutmütig)
- こころの大さ grossherzig (= grossnütig)
- こころの小さ kleinherzig (= kleinmütig, ängstlich)
- こころの広 weitherzig
- こころの狭 engherzig
- こころから herzlich (= innig, aufrichtig)
- こころから、こころを籠め herzlich; von ganzem Herzen; (= von ganzer Seele); aus Herzensgrund
- こころに懐く im Herzen hegen
- こころを屈にする sein Herz bezwingen (= seine Gefühle unterdrücken)
- 思ひやりのある人 der Mensch, der ein Herz hat
- 思ひやりのない人 der Mensch, der kein Herz hat; der herzlose Mensch; der unbarmherzige Mensch (= der erbarmungslose oder rücksichtslose Mensch)
- こころを行くばかり nach Herzenswunsch
- それは彼のこころから出たことである Das kommt aus seinem Herzen.
- 以上の如く、ヨーロッパ人のこころは、頭の他に心臓

(胸)にも宿るが、日本人のころはさらに「腹(肚)」に宿る。このような用法は他に見られない。

はら悪し(1.心が荒く立腹しやすい。おこりっぽい。短気である。2.心がすなおでない。はらぐらい。意地がわるい。)

はら痛し(おかしくてたまらない。笑止である。片腹痛い。)
はらが癒える(怒りやうらみなどが晴れて満足する。怒りがおさまる。胸がしずまる。)

はらが居る(怒りがおさまる。鬱憤が晴れる。「腹が立つ」に対していう語。)

はらが大きい(他を受けいれる気持が大きい。度量がある。太腹である。)

はらがかやる(方言。憤慨にたえない。腹が立つ。岡山県児島市下津井。《はらがでんぐりかえる》仙台。《はらがぎりわく》鹿児島県、種子島。)

はらが決まる(決心がつく。覚悟ができる。)

はらかく(後悔する。悔しがる。方言。怒る。腹を立てる。福岡県。佐賀県。長崎県。五島。奄岐。対馬。熊本県。天草島。大分県日田郡。宮崎県。鹿児島県。種子島。宝島。《はらをかく》長崎。《はらをこく》島根県鹿足郡。)

はらが黒い(心の中がきたない。根上が悪い。はらぐらい。)

はらが据わる(物事に動じなくなる。落ち着く。覚悟する。度胸が据わる。)

はらが立つ(怒る。癪にさわる。立腹する。はらだつ。)

はらが小さい(度量がせまい。小心である。)

はらが出来る(1.食事をすませて満腹する。2.考えがしっかりとまとまる。覚悟が決まる。)

はらが無い(1.胆力がすわっていない。度胸がない。2.度量がない。)

はらが煮える(激しく怒っていらいらする。「はらわたが煮えくりかえる」も同義。)

はらが脹れる(1.腹が肥えふとる。腹が大きくなる。2.腹いっぱいになる。飽食する。3.はらむ。妊娠する。4.言いたいことをいわないので、心に不快の思いがたまる。)

はらが太い(1.腹がふくれている。満腹である。2.度量が広い。胆力が大きい。3.横着である。方言。満腹の感じ。腹がいっぱいだ。島根県那賀郡下府。《はらんふとか》熊本。)

はらから(1.もとより。元来。生まれながら。2.本心から。心底から。)

はらが悪い(方言。1.腹が立つ。癪にさわる。秋田県。2.腹が黒い。名古屋。)

はらつかむ(方言。きわめておかしい状態を表わす。腹をか

かえる。腹の皮がよじれる。筑後久留米。《はらひく》「万歳が面白くてはらひいた」三重県志摩郡越賀。

はらで行く（1.真心をもって接する。2.度胸で応対する。大胆に行動する。はったりで行く。）

はらに合う（1.氣に入る。2.飲食物をうまいと思つて食べる。口に合う。）

はらに味わう（心中でじつくりと玩味する。）

はらに一物（心中にたくらみのあること。胸に一物。）

はらに落ちる（合点がいく。納得する。）

はらに障える（感情を害する。氣にさわる。）

はらに据えかねる（怒りをおさえることができない。）

はらに惚れる（氣立て・性格などに惚れる。）

はらに持つ（心に遺恨をいだく。恨みに思う。根にもつ。）

はらの内（1.腹の内部。腹のなか。2.心の中。胸中。ころ。腹のなか。）

はらの底（心の奥底。意中。）

はらの中（1.腹の内部。腹のうち。2.心中。胸中。心。腹のうち。）

はらの虫・はらの中の虫（1.人体の腹中に寄生する虫。回虫の類。2.空腹ときの腹鳴りを、腹中に虫がいて、それが鳴くものとしていう、その虫。3.腹立ちの感情などを腹中にいる虫によって起こるものとしていう、その虫。腹立ちや不満な

どの感情。）

はらの虫の居所が悪い（きげんが悪い。）

はらの虫が治まらない・はらの虫が承知しない（癪にさわつて我慢ができない。腹立つ心を押えがたい。）

はらは背に替え難し（大切なことのためには、他のことを顧みる余裕がない。背に腹はかえられぬ。）

はらへ落ちる（納得がいく。腑に落ちる。）

はらへ嵌る（心底から氣に入る。）

はらを合わす・はらを合わせる（心を通じ合わせる。一致協力する。ぐるになる。共謀する。）

はらを癒す（怒りを晴らす。鬱憤を晴らす。）

はらを居る（怒りをしずめる。鬱憤を晴らす。）

はらを入れる（心をうちこむ。真剣になる。）

はらを売る（金銭を離れて誠意を見せる。真心を尽くす。江戸末期上方の遊里での流行語。）

はらを扶る（人の意中を見とおして鋭く問い尋ねる。）

はらを決める（覚悟をきめる。決心する。）

はらを探る（1.それとなく人の意中をうかがう。2.腹を診察する。）

はらをしまう（方言。1.腹ぐあいを悪くする。腹をこわす。2.腹を診察する。）

「西瓜を食いすぎてはらをしまうた」高知県。2.落胆する。

力を落とす。岡山県児島。)

はらを握える (1. 怒りや恨み、鬱憤を晴らす。2. 心を落ち着ける。氣持をしずめる。がまんをしてこらえる。怒りを押える。3. 覚悟をきめる。)

はらを立てる・はらを立つ (怒る。立腹する。)

はらを見抜く (人の意中を察知する。人の心を察見する。)

はらを読む (相手の心中を推測する。相手の考えを知る。)

はらを縫る・はらを振る (ひどくおかしくて、身体をよじって大笑いをする。)

はらを割る (本心をうちあける。包み隠さずすべてをさらけ出す。)

前述の「腹黒い」という日本語の表現が、ドイツ語で「腹黒い心臓 (schwarzes Herz)」と表現するが、興味深いことである。

「身体言語」(《Leibsprache》)において「からだ」(《Leib》)と呼ぶのは、因果律の支配下にある「肉体」(《Körper》)と区別して、「世界のなかで、世界に向って、意味として現象している身体」(L. Binswanger)であるからである。

「からだ」の言葉は、必ずしも全身でもって語られるばかりではなく、前述の「腹」や「心臓」のように、しばしば身体部位や身体の一部でもって語られる。とくに日本語の場合は、全身のあらゆる部位に亘って「身体言語」が用いられ、世界に類を見ないほど豊富である。

身体言語はまた吞む・吞み込む・咬む・吐くなどといったような摂食行動に関して用いられ、「こんな要求はとても呑めない」、「あの学生は頭が悪くてのみこみが悪い」、「咬んでふくめるように教える」、「咬みつくような言い方」、「勝手な熱を吐き散らす」、「吐き出すように言う」、「吐き捨てるように言う」などと日常会話でよく用いられる。

嗅覚的身体言語は一般に警戒的・防衛的傾向が強く、「うさん臭い奴」、「……の臭いがする」、「きなくさい状況」などのように、何かきわめて無気味なしかも危険な状況を暗示する。

味覚的身体言語は一般に人格特性や性格に関して用いられることが多く、「くどい人」、「しつこい人」(てんかん性格を想起させるような反復的粘着傾向)という表現は、鍋料理が次第に煮つまつたり煮返したりするうちにくど

い味になることや、最初に口にした時からしつこい味の
とんこつ料理などに対比すると、このような表現がいかに
適切なものであるかがよく理解される。

「くどくどと口説き落とす」、「きれいさっぱりとあき
らめる」、「淡泊な人」(ざるそばや寿司の味)、「こくのあ
る人」(舞の生一本のような純粹豊厚なコク)、「練れている
人」(羊羹の味)、「あじけない人」(無味)、「水くさい人」
など興味深い表現が多い。

「甘い」は一般に味覚に関して砂糖や蜜など糖分の味
があることであり、対語としては「辛い」の反対であ
る。したがって塩気が薄い、辛いという場合にも使
用される。しかし、心理的に砂糖や蜜の味のように感じ
られるさまに関して用いられることが極めて多い。

(一)言葉に関して、人が聞いて気持がよくて、というか
うかと欺されそうである。「甘い言葉」、「甘い話」、「甘
言にだまされる」などの用法がある。

(二)愛情がこまやかである。男女の間の愛情についてい
うことが多い。「甘い生活」

(三)音楽や香りやその他のいろいろの物事について、うっ

とりと快い。「ヘリオトロープの甘い香り」

さらに、心理的に塩気のきいていないような感じとい
うことから、きびしさ、鋭さ、強さなどの乏しいさまに
いう。

(一)なまぬるい。手ぬるい。また、愛情におぼれて厳格
でない。「子供に甘い」、「女に甘い」、「採点が甘い」、
「考えがまだ甘い」、「世の中そんなに甘いもんやおまへ
んで」、「人生観が甘い」、「作戦が甘い」、「小成に甘んじ
る」

(二)しっかりしていない。きっちりしていない。しまり
がない。「糸もあまく、織もあまい」、「この作品はモチ
ーフがあまい」、「ねじが甘い」、「くいこみがあまい」。
相撲の解説などでよく聞く「脇があまい」、「最後のつめ
があまい」などもこれに類する。

(三)切れ味が悪い。「刃物の切れ味が甘い」

(四)取引用語では、物価、株価がやや低い。また、低く
なり気味である。

(五)芝居などで興業物の不入りなのという。「あまい入

り」

方言としても、刃物が鈍い（新潟県中魚沼郡、静岡県磐田郡水窪）という意味に用いられるが、「愚かな、少し足りない、まぬけな」という意味に、青森県津軽、山形県米沢、岡山市などでは用いられている。

この他に、「あまい汁を吸う」（苦勞しないで利益だけを得る）、「あまい酢」（みりんまたは砂糖を混ぜた酸味の少ない酢。転じて、考えや態度が甘いことという。いいかげんな考えや態度。甘口）、「あまい物に蟻がつく」（甘いものに蟻が集まるように、利益のある所には人が集まることにいう）、「あまく見る」（物事を軽く見て、気を許したり、軽蔑したりする。などる。なめる）などの表現がある。

「からい（辛・苛・鹹）」は味覚について、舌を刺すような感じのあるさまである。

(一)唐辛子、生姜、山葵、山椒、胡椒などのように、舌や口をびりびり刺激するような感じのあるさま。

(二)塩の味のあるさま。しおからい。

(三)酸味の強いさま。すい。

(四)酒気の強いさま。アルコール度の高いさま。甘味の少ない濃厚なよい酒の味にいう。

心理的に次のような場合。

(一)苦痛を感じて、身や心が堪えがたい感じのする場合にも、「からい」という。

(イ)むごい。残酷だ。

(ロ)容赦がない。きびしい。「試験の点がかからい」、「地にかからい打ち方」（囲碁用語）

(二)苦しい。つらい。せつない。苦痛だ。「からき目」

(三)氣にくわない。いやだ。

(四)苦痛を感じるほどはなはだしい。堪えがたいほどにひどい。

(五)もう少しでだめなところだ。あぶない。あやうい。すんでのことだ。からくも、からくして、からき命。

なお、方言では次の二つの意味が区別される。

(一)刃物の切れ味がいい。静岡県磐田郡水窪。

(一) 声が大きくてかん高い。愛媛県大三島。

(二) 「にがい(苦)」は、味覚について、舌を刺激し、不快な感じのあるさまである。

(三) 苦い味に似て、不快である。面白くない。不機嫌である。いとわしい。にがにがしい。「にがい顔」。

(四) つらい。苦しい。「にがい経験」「にがい失恋」。

「にがくち(苦口)」という言葉があるが、にがにがしい物の言い方、相手の気にさわるようなことばづかい、にくまれぐち、毒舌のことである。

方言では、次の二つの意味を区別する。

1、苦言。忠告。《にがぐち》滋賀県彦根。

2、悪口。石見、広島県。《にがぐち》広島県高田郡。

なお「苦い」という語を含んだ言葉として、「にがて(苦手)」、「にがはだ(苦肌)」、「にがみ(苦味)」、「にがむし(苦虫)」、「にがりがお(苦顔)」などがある。

「しぶい(渋)」には次の五つの意味がある。

(一) 渋柿をかじったような、舌をしびれさせるような味

である。

(二) 声などがなめらかでない。

(三) 金を出すのをいやがるさまである。けちである。しわ(き)い。「しぶちん」

(四) 華美でなく、地味で落ち着いた趣がある。落ち着いた深い味わいがある。くすんでいて美しい。「渋い好みの背広」、「しぶい喉をきかせる」、「しぶかわが剝ける」
(五) 不幸そうである。にがりきった表情である。不機嫌そうである。「しぶい顔」

方言として、次の四つの意味を区別する。

1、物が円滑でない。長野県佐久。《しぶさい》鹿児島

島県喜界島。

2、髪の毛がなめらかにすけない。青森県津軽。

3、執拗である。しぶとい。石川県。

4、けちである。栃木県河内郡、千葉県東葛飾郡富勢。富山県婦負郡。石川県河北郡。長野県東筑摩郡。三重県阿山郡。滋賀県伊香郡。京都。大阪。兵庫県明石郡。奈良県吉野郡。和歌山県。徳島県。《しぶい》埼玉

県秩父。大分県日田郡。

「しぶいと(渋糸)」、「しぶかみ(渋紙)」、「しぶくち(渋口)」、「苦言。皮肉。惡口」、「しぶしぶがお(渋々顔)」、「いやいやそんな顔。不機嫌な顔つき」、「しぶちゃ(渋茶)」、「しぶかわ(渋皮)」などの言葉はよく用いられる。

「甘い」は「あまえる」に通じ、相手の理解や好意によりかかつて(依存・しがみつき欲求)甘美な状況をエンジヨイする(快楽主義)の口唇愛(Oraltia)・^mの世界であるのに対して、「渋い」は「しぶる」に通じ、渋滞、けちなどの消極的閉鎖つまり肛門愛(Analitia)・^dの世界である。また、「あまい」は未熟・未完成・不徹底・無防備・安易であるが、「しぶい」は円熟・完成・深く落ついた味わい・地味な美しさであり、「あまい」と「しぶい」は或る意味では対極性を示している。

「あまい」——「からい」は塩気の種類によって対比していると共に、「あまい」——「にがい」は快・不快の感情の対極性を示している。

したがって、従来「あまい」の対語として「からい」が対比させられていたが、場合によっては、「にがい」や「しぶい」が「あまい」の反対概念ともなりうる。

われわれが最初に出会う「身体」は、「わたくしで

ある身体」、つまり「主体としての身体」(主観身体)である。われわれは内面からそれを生き、直接にそれを把握しており、身体はつねにわれわれとともに現前している。そして、身体は、普通それ自体としては意識されないままにとどまっている。われわれは「身体をもつ」のではなく、「身体である」と言うべきであらう。

対象化しうる身体を所有しながら、他方では思惟する実体として、世界のなかで世界に相対して存在するのではなく、身体とともにあるわたくしとして、否身体でもあるわたくしとして、被投の状況(Aufgericht-Sein)のなかで、これに向って自己全体を投企してゆく現存在として、われわれは生きているのである。

発声言語、心像言語、身体言語という三つの表現様式に分節してゆく言葉の基礎に、一定の実存的意味方向をもつ統一的根源語の存在することを、時として日常言語は、きわめて含蓄的に示してくれるのである。世界に類をみない豊かな身体言語をもつ日本人は、この意味ではまことに幸せであり、この研究領域で努力することは、日本人にとって義務であり、責任であるかも知れない。

(つづく)

◎『浄土』表紙版画絵販売についての案内

『浄土』六月号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、小林治郎先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節観に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えば幸いです。

また、大きな方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度の大西耕三先生の雅趣に富んだ版画絵が、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋二二一六

法 然 上 人 鑽 仰 会 振替(東京) 八八二二八七

木彫像・欄間・一品作



千手観音像

天地八尺

桧 材

24K仕上げ

真心値

山形渡し ￥270万

▶ ご一報下さればご相談に応じます。

有限会社 源 田

〒990 山形市相生町 TEL.(0236)22-2364

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

(送料不要)

浄 土 五十巻 六月号

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和五十九年五月二十五日 印刷
昭和五十九年六月一日 発行

編集人 宮 林 昭 彦
発行人 佐 藤 密 雄
印刷所 長谷川印刷(株)

東京都千代田区飯田橋一十一一六

発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒101 振替東京八一八二一八七番

竹中信常博士頌寿記念論文集

宗教文化の諸相

〔編集・発行〕 竹中信常博士頌寿記念論文集刊行会

〔体裁〕 B5判変型一四〇〇頁 定価三五〇〇〇円

特別定価二八〇〇〇円（六月末日まで）

○すいせんのことば

浄土門主・知恩院門跡 藤井実応

〔宗教人必読の書〕——竹中博士の頌寿と大正大学ご退任を記念して刊行された『宗教文化の諸相』を拜見させて頂きますと、今日の学界を代表される内外の学者が寄稿され、しかも内容は多岐にわたる専門分野がカバーされています。博士の人となり、学問の広さを如実に示しているといってもよいでしょう。今日、仏教界をとりまく現状はきびしいものがあります。幅広い知識と絶えざる研鑽が宗門人に要請されています。本書はまさに時機を得た恰好の書といつてよいでしょう。広く江湖に推せんしたいと思います。

●発行●

〒170 東京都豊島区西巣鴨三丁目二〇番一

号 大正大学宗教学研究室内

竹中信常博士頌寿記念論文集刊行会
電話〇三（九一八）七三一―番

●申込方法●

右、刊行会直接申込者のみ特価二八、〇〇〇円にてお頒け致します。
申込み期限は、昭和59年6月末日迄。書店に御申込の場合は定価三五、〇〇〇円。△発売元 山喜房仏書林△

第五十巻

六月号

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回一日発行
昭和五十九年五月二十五日印刷 昭和五十九年六月一日発行